



No. 151272

〔民俗編Part14〕

あるじでえ

No. 27

世田谷区教育委員会 民家園係
〒157-0067 世田谷区喜多見 5-27-14◎ 次大夫堀公園民家園
☎ 03(3417)8492◎ 岡本公園民家園
☎ 03(3709)6959平成7年3月1日 発行
平成15年10月 増刷

民 具

○ <はじめに>

岡本公園民家園と次大夫堀公園民家園に移築されている古民家の内部や外回りには、世田谷区内の家々で使われていた農機具や家具調度品などが展示されています。それは、両民家園が「生きている古民家」というテーマに添って維持運営されているからで、区民の方々に昔の人々の生活ぶりを学習していただきたいとの主旨によるものです。

これらの農機具や家具調度品は、一般に民具と呼ばれています。民家園係では、区民の方々から寄贈を受けた5千点以上にもなる民具を整理し、調査研究を実施しています。

○ 今回の「あるじでえ」では、民具とはどのようなものなのか、そしてそれを収集して保存することにどんな意義があるのかについて考えてみることにします。

<民具の定義について>

民具とはどのような物なのでしょう。柳田國男編集の『民俗学辞典』では、「民具は近代的な機械工業による生産物を含まず、主として家々村々でつくられた古風なもの」と書かれています。この定義に従えば、民具は村人の手作りになる物で、昔から使われてきている物ということになります。大

塚民俗学会編集の『日本民俗事典』でも、「民具は民衆が日常生活の必要から制作・使用してきた伝承的な器具・造形物」と、同じような内容の説明をしています。しかし、このふたつの代表的な民俗学辞典の説明ではあまりにも漠然としていますので、宮本常一著『民具学の提唱』の中からもう少し詳しい民具の説明を紹介しましょう。宮本常一（故人）はわが国における先駆的な民具研究者のひとりとして有名で、次のように民具を定義しています。

- ①民具は有形民俗資料の一部である。
- ②民具は人間の手によって、あるいは道具を用いて作られたものであり、動力機械によって作られたものではない。
- ③民具は民衆が、その生産や生活に必要なものとして作り出したもので、使用者は民衆に限られる。専門職人の高い技術によって作られたものはこれまで普通、工芸品、美術品などといわれ、多くは貴族や支配階級の人びとによって用いられた。これは民具と区別すべきである。
- ④民具はその製作に多くの手続きをとらない。専門の職人が作るというよりも、素人または農業、林業、漁業などのかたわら製作しているものである。
- ⑤民具は人間の手で動かせるものである。
- ⑥民具の素材になるものは草木、動物、石、

金属、土などで原則として化学製品は含まない。

⑦複合加工を含む場合は仕上げをするものが、素人または半玄人であるもの。

このように宮本常一はかなり詳しく民具について説明していますが、問題が残らないわけではありません。例えば日常の食事にお碗やお盆は、昔は人力のロクロを使って作られていましたが、今では電動の動力機械によって大量生産されています。製作工程が大きく変わってしまったからといって、お碗・お盆の形や使われ方までも大きく変化したわけではありません。ですから、人力か電力かの違いだけで、民具かどうかを判断することはできないように思われます。

あるいはまた、代表的な農具のひとつに箕(「あるじでえ」No.6を参照してください)があります。この箕を作るには高度な技術が必要なため、専門の人達の手で作られてきました。専門職人の手で作られたからといって、貴族や支配階級の人々の間で使用されてきたわけではなく、箕は大切な農具として農民達によって使用されてきたのです。ですから宮本常一の言うように、製作者が専門職人か否かで、民具かどうかを判断することはできないでしょう。

こうした問題点があるにしても、宮本常一の挙げた7つの指標は、民具を定義するためのおおよその目安になると思われます。

<民具の分類>

民具は人々が日常生活の中で使用してきたものですから、その種類は多く、数え上げることができないほどです。そのためか、現在でもきちんとした民具の分類案はなく、研究者によってさまざまな分類方法が採られています。

代表的な民具分類案のひとつとして利用されているものに、アチックミュージアム

(現在の神奈川大学日本常民文化研究所) 編『民具蒐集調査要目』があります。この本では次のように民具を分類しています(一部表現を変えています)。

- 1: 衣食住に関するもの ①家具②燈火用具③調理用具④飲食用具、食料と嗜好品⑤衣服⑥履物⑦装身具⑧出産、育児用具⑨衛生保険用具
- 2: 生業に関するもの ①農具②山樵用具③狩猟用具④漁撈用具⑤紡績・織物・染色用具⑥畜産用具⑦交易用具⑧その他
- 3: 通信運搬に関するもの ①運搬具②旅行用具③報知具
- 4: 団体生活に関するもの
- 5: 儀礼に関するもの ①誕生から元服までに使用する用具②婚姻の時に使用する用具③厄除に関する用具④年祝に関する用具⑤葬式、年忌に関する用具
- 6: 信仰・行事に関するもの ①偶像②弊帛類③祭供品・供物④楽器⑤仮面⑥呪具⑦卜具⑧祈願品
- 7: 娯楽遊技に関するもの
- 8: 玩具・縁起物

このように民具には多くの種類があり、簡略化してまとめることは困難です。しかしながら、民具研究に限らず、研究対象を分類することは研究を進める上で必要不可欠なこととされています。では民具研究は何のために行われるのでしょうか。

<民具研究の意義>

昭和25年に制定された「文化財保護法」では、民俗文化財を「衣食住、生業、信仰、年中行事等に関する風俗慣習、民俗芸能及びこれらに用いられる衣服、器具、家屋、その他の物件」と規定しています。そしてこれらの文化財を保存するのは、「文化財がわが国の歴史、文化等の正しい理解のため欠くことのできないものであり、且つ、将

来の文化の向上発展の基礎をなすもの」であるからとしています。

民俗文化財の中に含まれる民具に関して、これを研究することが日本の歴史の解明につながり、日本文化の理解を助けることになると考えられています。例えば岩井宏實氏は、「民具の概念」という論文の中で、「具体的な民具を通して、その民具を製作した技術、その機能、それをどう人間が使ったか、その民具が他の民具とどうかかわったか、そしてどう変遷したか、その民具は人々の生活にどう影響を及ぼしたか、また次代にどう伝承されていくかということが課題となる。すなわち、民具をとおして日本人の生活文化の構造と体系、さらには精神構造まで追求しようとするものである。」と述べています。

つまり、世田谷区内でどのような民具が使われてきたのか。そしてそれらの民具がどこから伝えられたものなのかを研究することで、世田谷の地域経済史や他地域との

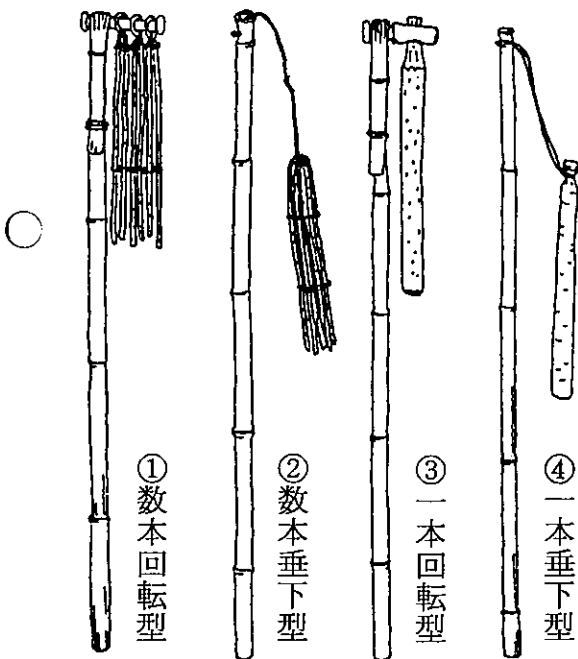
交通・交易史の移り変りが明らかになるのです。さらにはこうした研究が、世田谷の地域文化の特質や日本文化の特質を理解する手助けともなります。

ただ、民具は壊れやすく、一度失われると再び得ることが困難なものも多いのです。そのため保存することが必要ですし、壊れても同じ物を作り出すことができるような正確な実測図も必要となります。

<唐竿について>

民具を調査研究することは地域の歴史を明らかにすることであり、地域文化の特質を解明することであると述べました。最後に唐竿を取り上げ、民具研究の意義について具体的に示してみましよう。

唐竿はメグリボウ・クルリボウ・ムギウチなどとも呼ばれる脱穀用の民具で、これで麦や大豆などを篩いて実を落とします。この唐竿を南九州地域で調査研究した民俗学者小野重朗氏が「メグイボウとサーシ＝



メグイボウの型

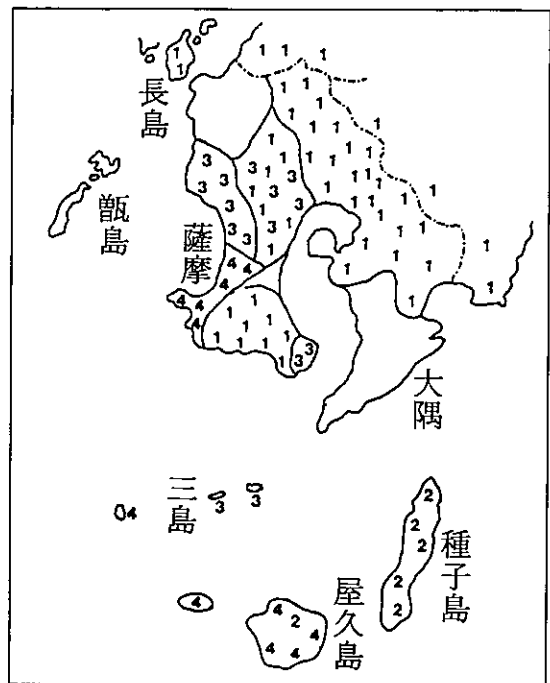


図1 メグイボウの分布

2つの脱穀用具の変異と分布＝」という論文を書いていますので、以下、同論文の内容を紹介します。

唐竿のことを鹿児島県と宮崎県南部ではメグイボ、熊本県ではブリビヤとかブリコと呼んでいます（これからは統一してメグイボウと呼ぶことにします）。メグイボウの形態と分布地を丹念に調べた結果、4つの型と図1のような分布のあることがわかりました。

①数本回転型

もっとも一般的な型を持つメグイボウで、その分布域も広い。カシ・サクラ・グミなどの細い枝を横に4本から6本ほど並べて固定し、これを長い竹竿の先端部の回転軸に取り付ける。

②数本垂下型

南九州のメグイボウの中ではもっとも特殊な形をしており、分布地をもっとも限られている。ツバキ・カシなどの堅い木の、まっすぐな枝2～3本を2つに折り曲げて束にし、竹竿の先端に取り付けた細縄に結び付ける。

③1本回転型

この型のメグイボウの分布地域は相当に広く、薩摩半島と大隅半島に点々とあり、痕跡的ではあるが南の島々にも広がっている。カシなどの直径5cm程の丸太棒を回転軸にはめ込んで固定し、①と同じ方法で竹竿に取り付ける。

④1本垂下型

①の数本回転型に対して②の数本垂下型

があるように、③の1本回転型に対してはこの1本垂下型がある。薩摩半島西南部の加世田市と川辺郡の海よりに集中的に分布するとともに、南西諸島にまで引き続き分布している。

以上のように南九州でメグイボウの型と分布を調べた小野重朗氏は、メグイボウが④の1本垂下型から③の1本回転型あるいは②の数本垂下型へ、そして最後に①の数本回転型へと発展していったであろうと結論づけています。そしてその変化発展の流れは北から南へ、そして東から西へ、北東から南西へ広がっていったとしています。

①の数本回転型へと発展したのは、もちろんこの型のメグイボウがもっとも効率よく脱穀作業を行うことができるからですが、1つ1つの発展過程には、並々ならぬ先人の知恵と努力があったはずで、動力機械を使って行われる現在の脱穀作業の背景には、こうした歴史が存在したことを知っておく必要があります。また、南九州という限られた一地域においても、幾筋もの文化の流れがあったのです。決してその地域だけで文化のすべてが形成されてきたわけではありません。

現在では使われることも、目にふれることもなくなったメグイボウという1つの民具を調査研究することで、私達は今まで気づけなかった多くのことを学び、知ることができます。

区文化財資料調査員 高見寛孝